■研究発表論文

メキシコ市ソカロにおける空間の捉え方と活動の変遷

Historical transition of how Mexico citizens have captured and used the space of Zócalo in Mexico City

渡辺　裕木*　　伊藤　弘**　　武　正憲**

Yuki WATANABE　Hiromu ITO　Masanori TAKE

Abstract: The Constitution Square located in the historical district of Mexico City, known as el Zócalo, has been the political, religious and commercial center of Mexico since the fourteenth century. Currently, El Zócalo is a place where political events such as Independence Day ceremonies are held, and it is also a base for demonstrative activities by a Mexican citizen. Government authorities that manage El Zócalo say that the space is a symbol of the public's identity, but many people who participate in demonstrative activities there insists that the reason of their activities is not only because El Zócalo is a symbol of the state power, but also because it is home ground for people on the opposition side. This study aimed to clarify how El Zócalo became one of the most important national symbols for Mexican citizens in various positions. We analyzed the quality and vicissitudes of the space of El Zócalo and its usage through graphical analysis of plans and pictures of the place of each period, from the Late Post-Classic Period to date, and the review of the background studies, the colonial period chronicle, and articles from magazines and newspapers.

Keywords: *The central square, Zócalo in Mexico City, Public space, Cultural Heritage*
キーワード：中央広場，メキシコ市ソカロ，公共空間，文化遺産

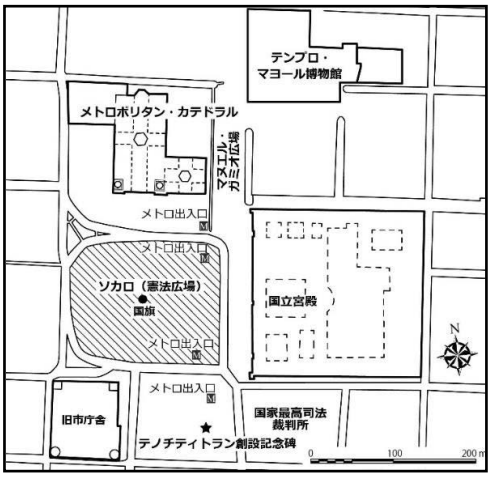
1．はじめに

（1）背景と目的

メキシコ合衆国の首都メキシコ市中央部に，国内最大の公共広場である憲法広場（Plaza de la Constitución）―通称ソカロ[1]―がある。ソカロは東西 160m，南北 139mの方形の広場で，中央に巨大な国旗が掲げられている（図－1）。ソカロを中心とした地域は，コロニアル期の街並みを残す歴史地区として，1987 年にユネスコ世界文化遺産リストに登録されており，これは 2010 年登録の「ティエラアデントロの王の道」の構成資産でもある[2]。

メキシコ市は，先スペイン期末期の後古典期後期（1350～1521 年）[3]にメシカ人によって支配されていた。その後，15 世紀初頭のスペインによる征服以降に，副王領ヌエバ・エスパーニャの首都となり，独立（1821 年）後は新国家の首都も置かれた。ソカロとその周辺は，メシカの治世より国政の重要機関が置かれ，現在は広場の空間と空間を取り巻く建造物の 1 つである国立宮殿が，主に儀礼的な国家的行事の会場として使われている。メキシコ政府は国立宮殿を「我々の国家アイデンティティの象徴」としていることからも[4]，ソカロおよびその周辺を国家の象徴と捉えていることがうかがえる。一方でソカロの所在地は，先スペイン期にはメシカの市が立った場所であり，コロニアル期にも市場の建物が建てられていた。また，ソカロ周辺に国民の利用する店舗が多くなる 19 世紀以降には，路面電車の停留所が置かれたり，公園的空間が造られたりし，現在ではメトロの出入り口が設置されており，常に人々の生活に馴染みの深い場所である。

メキシコでは，19 世紀の独立以降，国民国家を目指し，先住民（人数は多いが社会的下層部）でもあり，クリオージョ（大陸生まれのスペイン人で，人数は少ないが社会的上層部）でもあるが，実質どちらでもない「メスティーソ（異人種の混血）」[5]を創出し，これを国民として国家統合が図られた。ソカロおよびその周辺地域は，年間を通して国民による政治的示威行為の多い場所でもある[6]。これはソカロが，先スペイン期から現在に至るまで，一貫して国政の中心地である事から，19 世紀初頭以降メキシコが辿った「メスティーソ化という強力な国家統合のプロセス」[7]を通して，国や国民にとって象徴的な空間となり，「国家アイデンティティの根本的空間」[8]として国民に影響を与えた結果と推測される。さらにこの影響力は，ソカロが常に国民の生活空間として馴染みの深い場であったためより大きくなったと考えられる。



図－1　現在のメキシコ市ソカロ

このようにソカロの空間は，観光，人々の日常生活，国家的行事，国民の示威行動など多様な活動の場であり，既に歴史地区として保全の対象となっている地域の一部である[9]。しかし，文化遺産として管理し，活用の方向性を検討するにあたり，ソカロ周辺にある先スペイン期の遺跡や異なる時代の歴史的建造物群を従来通り個別に研究し，保存や公開に取り組むだけでは不十分である。文化遺産的価値のある空間が，空間を構成する個々の遺産の研究や保存に限らず，空間の成立過程を考慮したうえで一体的に保存することの重要性は，小野（1996）[10]により指摘されている。

*筑波大学大学院人間総合科学研究科　　**筑波大学芸術系

ソカロの場合，現在の国民のソカロに対する認識が築かれる過程で，いかに空間が形成され，それが時代毎にどのように捉えられ，利用されたのかについては十分に明らかにされていない。多様な遺産を構成要素とする空間の成立に関わる社会的歴史的意味を再確認し，現在の機能を理解することで，一体的な保存のあり方を検討することが可能となる。そこで本研究は，ソカロにおける空間の利用と捉え方の歴史的変遷を整理し，ソカロが国家および民族意識と強く結びついて認識されるようになった経緯を明らかにすることを目的とする。そして，ソカロと，国や文化の象徴になっている周辺の遺跡が所在する空間を，一体的に文化遺産として管理し，展示する方法について考察する。

（2）研究方法

落合はメキシコ市の公共建築やモニュメントを，「為政者が国民に刻み込みたい国家の記憶を可視化したもの」[11]と仮定し，それらが国民の生活空間において日常的に影響を与える可能性を指摘した[12]。また公共空間の利用は，政治体制によって変化してきたと推測できる。そこで本研究では，政治体制の顕著な変化により時代区分し，ソカロとその周辺の構成要素およびその社会的性質（活用方法）を，空間の捉え方と活動の変遷を文献資料を基に把握することから，現在のソカロの公共空間としての特徴と，ソカロに対して人々が抱くイメージを検証する。

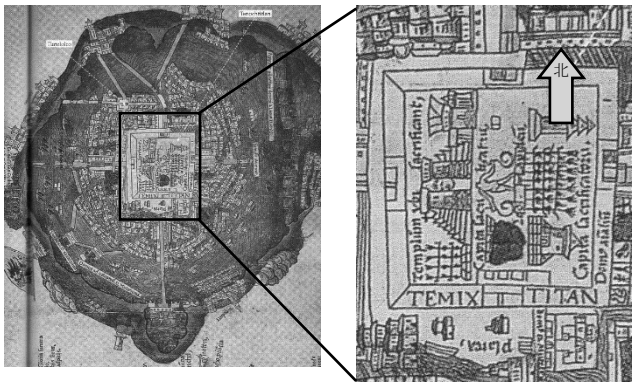
時代区分は，メシカ人によって支配された 14 世紀から現在に至るまでの範囲を対象とし，顕著な政治体制の変化を境として，I 期：後古典期後期（メシカ人による為政；1350～1521 年），II 期：コロニアル期（スペイン人による為政；1521～1821 年），III 期：独立以降期（1821 年～1911 年），IV 期：メキシコ革命期以降期（1911 年以降）の 4 期に時代区分した。

I 期では公表されている考古学調査結果を，II 期ではソカロを含む市域の当時の平面図を分析対象とした。また，この時期の空間の捉え方および利用状況は，スペイン人のコンキスタドールや聖職者がスペインに送った書簡や年代記などに残る記録から把握した。II 期については，ソカロを題材にした絵画や版画，当時の人々の生活に関する歴史学および社会学領域の先行研究からも情報を収集した。同じく III 期および IV 期は，時代毎の平面図を分析の対象とし，空間の捉え方および利用状況は，II 期と同様の資料に加え，考古学と周辺領域の調査報告書，対象地域に関して書かれた新聞記事や写真資料も分析対象とした。また，各時期のソカロの形成や，そこでの活動に直接的間接的に影響を与えたと推測できる歴史的事項を，ソカロの利用に関わる法整備の変遷や社会背景などに関する先行研究および新聞記事等から分析した。

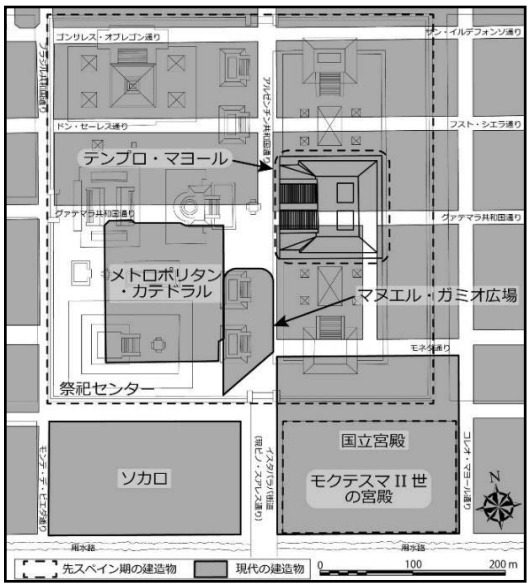
2．ソカロを中心とした空間の捉え方の変遷と社会的背景

（1）I 期：後古典期後期（1350～1521 年）

メシカの街メヒコ - テノチティトランは，14 世紀前半，現在の



図―2　メヒコ－テノチティトランの図　1524 年
（部分。筆者加筆）



図―3　メヒコ - テノチティトランの祭祀センターと現在のソカロ周辺

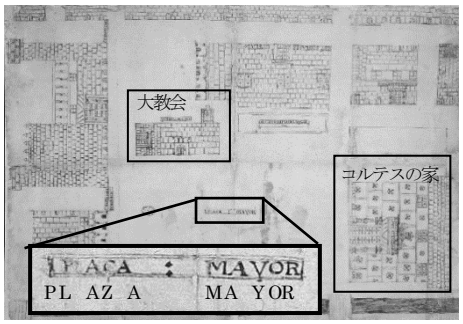
メキシコ市のほぼ全域に広がっていたテスココ湖中の島に建設された（図―2）[13]。遺構配置復元図 [14]によれば，ソカロの北側一帯（現在のカテドラル，マヌエル・ガミオ広場およびテンプロ・マヨール博物館周辺）は，メヒコ - テノチティトランの祭祀センターだった（図―1，3）。祭祀センターは周囲を基壇（コアテパントリ）に囲まれた [15]，約 330m 四方の空間で [16]，その内部には，テンプロ・マヨールをはじめ，様々な高さの建造物が 78 基あったとされる [17, 18]。メヒコ - テノチティトランは，メシカの伝説によると，「鷲が蛇をついばみ，ウチワサボテンにとまっている場所」に首都を置くよう命じた，メシカの最高神ウィツィロポチトリのお告げに従い建設された町である [19]。祭祀センターは，メシカ人がお告げ通りの情景を見つけ，街の建設を開始した場所であり，その主要建造物であるテンプロ・マヨールは，メシカ人の世界観における絶対的な中心地と考えられていた [19]。また，祭祀センターの現在国立宮殿がある位置には，メシカ族最後の君主モクテスマ 2 世の宮殿があった（図―2，3）[20]。

ソカロは，祭祀センターの南側，図―2 中ラテン語で「Platea」（スペイン語の広場（Plaza）の語源）とある空間で，ここにはメヒコ - テノチティトランで 2 番目の規模の常設市場があった。市場は，物品交換センターとしての役割に加え，多くの人々が集まる情報交換の場であり，商人の中にはスパイとしての職を兼業している者もいたという [21]。

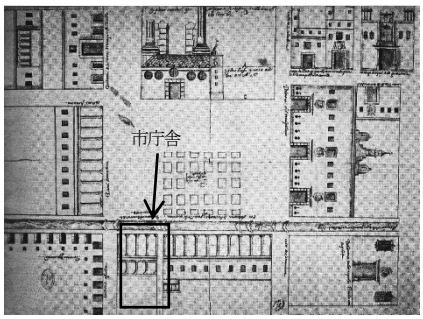
（2）II 期：コロニアル期（1521～1821 年）

1519 年，エルナン・コルテス率いるスペイン征服軍がユカタン半島岸から上陸，1521 年，中央高原地域に到達した。メヒコ - テノチティトランは同年 8 月 13 日に陥落，スペインによる支配が始まり，メキシコ全土の征服は 1524 年までに完了した [22]。コルテスは，メヒコ - テノチティトランの上に首都メキシコ市を建設し，メシカの街の痕跡を「消滅」させた [23]。以降コロニアルほぼ全期を通し，征服以前の遺物は僅かな例外を除いて，破壊されたり，人目につかないよう地中に埋められるなどした [24]。16 世紀半ばになると，ソカロの北西側にはフランシスコ会修道士により大教会（イグレシア・マヨール）が建てられた（図―4）。前項で述べたように，ソカロにはメシカの市場があったが，先スペイン期の市場の機能と重要性，集客力は，植民地の教会組織から注目されており，これを教会の人集めに有益に利用するために，先住民の市場の側に聖堂が建てられることがあった [25]。

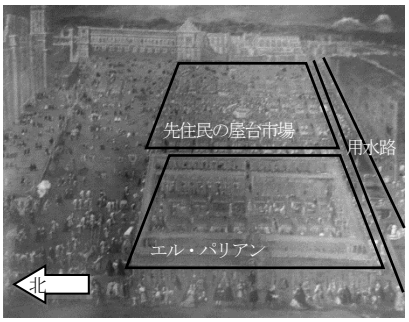
コロニアル期の都市計画は，スペインの都市理論 [25]およびイン



図－4　「プラサ・マヨール図平面図」
1562 年　作者不詳（筆者加筆）



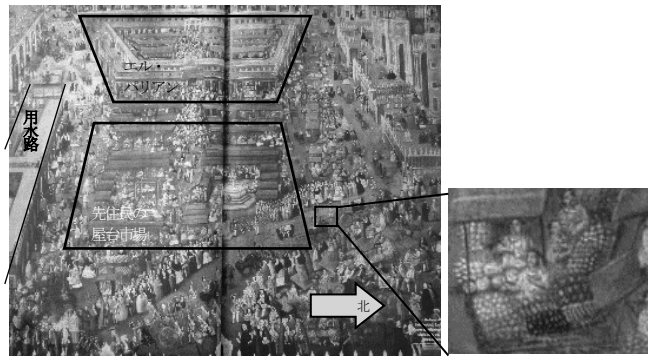
図－5　「プラサ・マヨール平面図」
1596 年　作者不詳



図－6　「プラサ・マヨールの眺望」1700 年頃
クリストバル・デ・ビジャルパンド（作者加筆）

ディアス法[26]に推奨された基準に強く影響を受けており[25]，1573 年，大司教区の聖堂としては質素な建造物であったイグレシア・マヨールの跡地に，カテドラルの建設が始まると[27]，ソカロはメキシコ市の中央広場「Plaza Mayor（プラサ・マヨール）」となった。カテドラルの建設には 200 年以上が費やされ，1813 年に竣工した[28]。コロニアル期の最も著名な画家の一人であるクリストバル・デ・ビジャルパンドが描いた，ソカロ西側からの眺望図（1700 年頃，図－6）には，画面左側，広場北側に，カテドラルが描き込まれているが，鐘楼の最上部などの意匠が異なり，建築途中であると思われる。ソカロ東側の，メシカ最後の王モクテスマ 2 世の宮殿があった場所には，征服軍を率いたコルテスの家が建てられ（1523 年竣工，図－4），複数年かけて増築された後，副王宮殿として使われるようになった[4]。1562 年と 16 世紀末のソカロ平面図（図－4，5）を比べると，コルテスの家あるいは副王宮殿は規模が大きくなっていることが分かる。ソカロ南側には灌漑用水路が東西に流れ（図－4，5，6，7），用水路の南側，ソカロの南西側には，市庁舎が建てられた[29]（1527 年竣工，図－5）。コロニアル期のカトリックの信仰および布教は，植民地支配の正当性の根拠とされ[30]，その象徴であったカテドラルと，政治権力の中心である副王宮殿および市庁舎がソカロを囲んで建設されたことで，ソカロはこの時期に，政治と信仰の中心としての性格を確立したと言える[31]。

また，ソカロはメキシコ国民の特別な活動の場であり，I 期同様，特に商業の重要な拠点であり[31]，先住民の市場，高価な食料品を売る市場，海外から輸入した高級品を売る「エル・パリアン」の 3 種の市場があったが[32, 33]，このうち，藁ぶき屋根の露店が並んだ先住民の市場と，1700 年に完成したエル・パリアンの建造物は[34, 35]，先述のビジャルパンド（図－6）およびアントニオ・プラドの作品に描き込まれている（図－7）。図－4，5 には，ソカロ南側の用水路に市場に品物を運ぶ小舟が多数通っているのが描かれており，図－6，7 には市場で働く多くの人々が，また図－7 にはカテドラルへ向かう副王の行列と，それを見守る群衆が見られるなど[36]，ソカロの空間が市場の利用者をはじめとする多くの人々で賑わっていた様子が分かる。



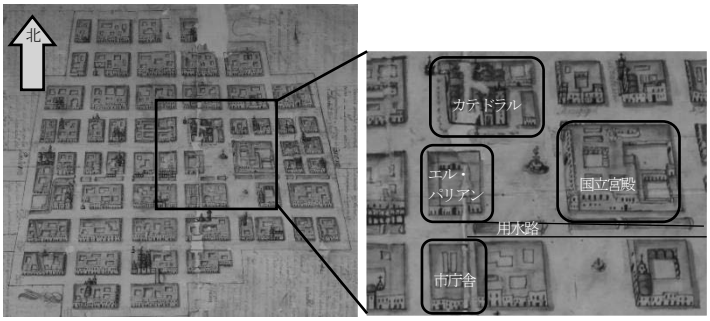
図－7　「メキシコ市のプラサ・マヨール」（右）
先住民の市場（左，一部拡大）
1769 年　アントニオ・プラド（筆者加筆）

1720 年のソカロ周辺には，I 期のメシカの街の様子を彷彿とさせる建物は残っていない（図－8）。しかし 18 世紀後半は，ヨーロッパの啓蒙思想の影響を受け，メキシコ国内ではスペインによる支配への不満と政府批判が起こり，ヨーロッパ起源ではない新しいアイデンティティの探求が起こる中[37]，1790 年，ソカロの南東部で I 期の遺物であるコアトリクエ神石彫および太陽の石が発見され[38]，2 年後，これらの出土品について書かれたアントニオ・レオン・イ・ガマの著書が出版されると，同地で栄えた古代文明についての学術的興味が高まった[39]。しかし当時の植民地支配勢力であったスペインは，敵対するイギリスやフランスをはじめとする欧州諸国から，16 世紀のメキシコ征服は，先住民を蛮族とみなした侵略行為だったと批判されていたため，先スペイン期のメキシコには高度な文明があった事を主張する必要があった。コアトリクエ神の石像は，偶像崇拝を禁じるキリスト教に対して異端的であるため地中に埋めてその存在を隠され，一方太陽の石は，正確な円形に彫られ，暦としての高度な機能も認められたため，先スペイン期文化の高さを証明するものとして，人目に付くよう，カテドラルの西の鐘楼の外壁に取り付けられた[38, 40]。

18 世紀後半になるとソカロには屋台の市場が見られず（図－9，図－9 中画面左端のエル・パリアンは，外壁が白黒の市松模様に塗られ，図－7 と比べ外観が大きく変化している。1794 年には，当時の副王ミゲル・デ・ラ・グルア・トラマンカにより設置されたスペイン王カルロス四世（1788 年即位）の騎馬像を中心に，ソカロの大部分が鉄柵で円形に囲まれ，ソカロは人々の往来が制限される空間であったと思われる（図－10）[41]。コロニアル期最末期の 1812 年には，スペイン 1812 年憲法（La Constitución de Cádiz）を記念し，ソカロは，現在の正式名称である「憲法広場（Plaza de la Constitución）」と呼ばれるようになった[42, 43]。

（3）III 期：独立後（1821 年～19 世紀末）

1821 年 9 月 27 日，イトゥルビデ将軍率いるメキシコ独立軍が



図－8　「メキシコ市街地平面図」（左），中央広場周辺（右，一部拡大）
1720 年　作者不詳（筆者加筆）

図－9　「カテドラルとエル・パリアン」
1780 年 作者不詳

図－10　「メキシコのグラン・パレスの眺望」
1797 年　ヒメノ・イ・プラネス（作画），
ファブレガト（版画）

図－11　「メキシコ独立荘厳宣誓式」
1821 年　作者不詳（1821 年）

ソカロに凱旋し，翌日当地で独立宣誓式が行われた [4]。以降，メキシコでは国家元首の着任をソカロで祝う習慣ができた [43]。式典の様子を描いた作者不詳の絵画（図－11）では，カルロス四世の騎馬像が人目につかないよう覆われ [44]，広場には多くの人々が集まっている。イトゥルビデは翌年誕生したメキシコ帝国の皇帝に即位し，副王宮殿の建物を王宮として，近代国家の組織造りに着手したものの 1 年以内に失脚したが [4]，続いて誕生したメキシコ合衆国の歴代政府も，同建造物を国立宮殿と呼び，主要官庁を設置した。1861 年に大統領に就任したベニート・フアレスは，自らの執務室および居住空間を同宮殿内部に置くなど，国立宮殿が近代メキシコの政治的拠点としての性格を確立する一方で，カテドラルは，信教の自由を認めた 1857 年憲法の可決に伴いカトリックが国教ではなくなったため，徐々に政治的役割を失った [4]。1843 年，サンタ・アナ大統領により，エル・パリアンの撤去と独立記念碑の建設が計画されたが（図－12），記念碑は完成せず，台座部分のみが広場中央に残された（図－13 中，階段円形ピラミッド型の部分）。この時期から，憲法広場は「台座」を意味する「ソカロ（Zócalo）」という通称で呼ばれるようになった [45]。

19 世紀半ば以降のソカロは，緑豊かな公園的空間となった（図－13）が，1840 年には連邦主義者ゴメス・ファリアスらが，国家の中央集権的傾向に陸軍を率いて反乱を起こし，国立宮殿が大砲の攻撃を受け（図－14）[46]，米墨戦争の際には，1847 年の独立記念日にソカロに到達した米軍により，国立宮殿に星条旗を掲げられるなど [47]，国家的騒乱の舞台となった。また，先述のフアレス大統領は 1864 年，フランス帝国の政治的介入により失脚したが，メキシコ市を去る際，国立宮殿のファサードの扉を閉め，3 年後に地位を回復した際には，ソカロに「再入城」する儀式を行うなど [4]，この地が政治権力の中枢である事が印象付けられた。

（4）Ⅳ期：メキシコ革命期以降（1911 年～）

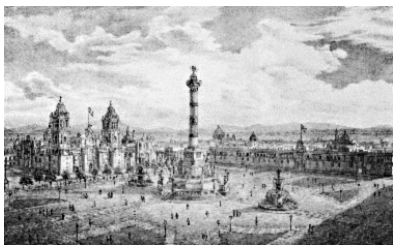
1876 年より 30 年以上続いたポルフィリオ・ディアス大統領の独裁政権（ポルフィリアート）の最末期である 1910 年 11 月，国立宮殿では国家の独立 100 周年が祝われた。翌年 11 月，フランシスコ・マデロの武装蜂起によりメキシコ革命が勃発し，ソカロは再び戦いの舞台となった [48]。革命以降の政権にも国立宮殿の政治的機能が引き継がれたが，行政の主要機関は徐々に他の地域にも分散され [4]，1926 年には改装工事が行われた。ファサードのメイン・バルコニー上部には，独立戦争の際にイダルゴ神父が鳴らした鐘が取り付けられ，さらにその上には，革命政府が目指した「混血（メスティーソ）の国」を象徴する，先住民とスペイン人それぞれの戦士像が飾られた [4]。鐘は，毎年 9 月 15 日夜，国立宮殿で祝われる独立記念式典の際に，バルコニーに立つ大統領によって鳴らされ，「ドローレスの叫び」[50]が再現される。Ⅲ期と同様に公園的空間が造られ，植え込みの形や装飾品の変更など細部の変化はあったものの，1950 年代後半まで存続した（図－15）[49]。

1957 年から 1958 年にかけて，メキシコ連邦区（現在のメキシコ市）行政長であったエルネスト・P・ウルチュルトゥは，ソカロを，革命後の体制や政治的式典を行うにより相応しい空間にする為，公園的空間を撤去し，コンクリート板を敷き詰めた現在のソカロの状態を完成させた（図－16）[50]。

現在ソカロ中央にある国旗は，1999 年の国防省による国家アイデンティティ・プロジェクトにより，国内各地に設置された記念碑的国旗（Bandera Monumental）と呼ばれる巨大なサイズの国旗である [51]。ソカロ全景を写した写真においても，この国旗の，メヒコ-テノチティトラン創設の伝説（第 2 章 1 節）を図案化したエンブレムまではっきり確認する事ができる。広くなった空間では，独立記念式典などの集会や軍事パレード，体操選手によるデモンストレーション・パレードが行われるようになった [49]。またこの空間では，1968 年，学生による大規模な示威運動が行われ，政府は集会の解散を要求し，戦車を出動させた [49]。

一方ポルフィリアート後期の 1900 年頃から，メシカの祭祀センターを研究するプロジェクトが実施されるようになった。特に革命勃発後の 1913 年，テンプロ・マヨールの一部分が発見されると，以降ソカロ周辺で断続的に実施された発掘調査により，メシカの政治的中心地の存在が具体的に知られるようになった [52]。1970 年には，先述のメシカの伝説を表現したテノチティトラン創設記念碑が，ソカロを南側から見晴らせる位置に設置された（図－1，16）が，これは「（先住民文化の）偉大な精神が現代メキシコ人にも受け継がれているという主張」[53] と捉えられる。

1978 年，テンプロ・マヨールの一角から，コヨルシャウキ女神が彫られた石彫が発見されると，同地の考古学調査は国家プロジ



図－12　「独立記念碑完成予想図」
1843 年　ペドロ・グアルディ

図－13　「武器の広場の庭」
1855 年　カシミーロ・カストロ

図－14　「メキシコの国立宮殿―1840 年 6 月 15 日から 27 日までの騒乱の後－」
1843 年　ペドロ・グアルディ

図－15　ソカロ西側からの眺望
（1941 年撮影）

図－16　ソカロ南東側からの眺望
（2016 年撮影）

図－17　「テノチティトラン創設」1970 年
カルロス・マルキナ

ェクトとなり，発掘された遺跡は博物館として一般に公開されるようになった。女神像の発見は，石彫の大きさと図柄のインパクトに加え，テンプロ・マヨールがメシカのウィツィロポチトリ神（メヒコ-テノチティトランの建設場所を予言した最高神）に捧げられた神殿だとする伝説（第２章１節）の裏付けと言え[54]，ソカロの北側がメシカの祭祀センターであった事を示す決定的な証拠となる。

３．まとめ

Ⅰ期のソカロは，メヒコ-テノチティトランの祭祀センターに隣接し，人々が経済活動を営む重要な公共空間であったと考えられるが，政治権力と直接的には結び付いて捉えられていなかったと推測できる。Ⅱ 期にはソカロ周辺からメシカの痕跡がなくなり，ソカロを中心に，政治権力の中心となる建造物が建てられた。スペインは，メキシコの征服の根拠を新大陸のキリスト教化に求めた為[28]，教会も政治的に非常に大きな影響力を持っていた。また，Ⅰ 期と同じく経済活動が営まれたが，時の経過とともに，被植民者である先住民や大多数のメスティーソとは関係のない政治権力と結びつく空間に変化していった。この為，独立への機運が高まるⅡ期末期には，スペインによる支配体制に反発する人々にとっては，より排他的な空間になったと推測できる。Ⅲ 期初頭には，従来の政治権力を象徴する空間であるソカロで独立が祝われ，政治的建造物は新勢力に引き継がれた。人々の経済活動の場としての機能は復活せず，公園空間が整備された。Ⅳ 期もソカロは政治権力と結び付いた公共空間であり，また当初は Ⅲ 期に形成された公園的空間も継承した。Ⅲ 期およびⅣ 期は，Ⅱ 期に失ったⅠ期の文化を再認識し，「メスティーソ化という強力な国家統合のプロセス」（第１章１節）が進められた時期であり，Ⅰ期以降常に政治の中心であり，人々の生活にも馴染みの深い場所であったソカロは，人々が国家の歴史とアイデンティティを体感できる場に変化していることが推測できる。さらに Ⅳ 期後半には，ソカロの国家と結びつく性格の更なる利用を目論む政治権力が現れ，コンクリートで舗装された広場が整備され，朝夕毎の国旗の掲揚と降納の儀式や，国立宮殿で式典が行われる際の国民の参集，大統領による軍事パレード謁見など，大人数を収容する事が可能な国家的行事の会場として使われるようになった。また，テノチティトラン創設記念碑の設置やメシカの遺構の展示がソカロ空間および周辺の建造物と連続した空間で行われるようになったが，ここには政治権力の，先住民文化の「偉大な精神が現代メキシコ人にも受け継がれているという主張」[55]，あるいは同文化に対する敬意を人々に示す意図が見られる。

つまりソカロは，Ⅰ 期以来の国政の中心であり，また時代毎の痕跡を現在の空間に留めていることから，現代メキシコの国家アイデンティティと言えるメスティーソ文化を象徴する空間であるといえる。また，形成以来，常に国民の生活と関わりの深い場所である為，より国民の意識に強い影響力を持つと考えられる。
本研究では，ソカロの空間に対する歴代の政治権力の強い政治的意図と，それが人々の空間に対するイメージに与えてきたと思われる影響を示した。ソカロは今後も政治的に利用される（第１章１節）と同時に，様々な目的で多様なイベントが実施され続ける場である[56]。一方，政治や権力だけでなく国民とも関わってきたという，文化遺産としての側面を保護し普及を図る為には，周囲の歴史的建造物や遺跡を，個別に公開し解説パネルやガイドツアーによって展示する従来の取り組みだけでなく，空間自体を使って体験させる必要がある。例えばソカロにⅠ, Ⅱ 期の市場やⅢ, Ⅳ 期の公園的空間を時限的に再現し，その中で歴史に関する展示イベントを開催するなど，時代毎の空間およびその役割を再現し，展示と共に市民に体験させる工夫が必要と考られる。

謝辞: 本研究はJSPS 科研費 16K08125 の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

1) ソカロは，憲法広場の呼称として 19 世紀半ばから使われているが（第２章３項），本研究では，現在の憲法広場の空間（図－1 中，斜線部分）について，時代や空間の状態に関わらず，「ソカロ」と呼ぶことにする。同様に，ソカロ周辺の建造物に関しても，時代によって名称が異なる事があるが，本研究では現在の名称を呼称とする。

2)「メキシコシティー歴史地区とソチミルコ」（1987 年登録）：世界遺産地域別リスト（北・中米）：日本ユネスコ協会連盟ホームページ< http://unesco.or.jp/osam/list/america_1/>，更新日不明，2017.8.20 参照

3) メキシコでは, 1521 年のスペインによる征服以前を先スペイン期と呼び, この中で, 土器の生産が開始された紀元前 2000 年以降が，文明の発展に従い「先古典期」，「古典期」，「後古典期」に区分される。本稿で言及する後古典期後期は，後古典期を前期と後期に分けた後者である：井上幸孝編（2014）：メソアメリカを知る為の 58 章：明石書店，359pp

4) Gonzáles Gamio, Ángeles：情報：国立宮殿ホームページ <http://www.historia.palacioncional.info/index.php>，更新日不明，2017.8.21 参照

5) メスティーソとは，コロニアル期，本国生まれのスペイン人あるいは新大陸生まれのスペイン人と先住民から生まれた人々を指す言葉だったが「実際には，（…）その人の出自や生まれを意味するよりも, インディオとスペイン人のいずれの社会層にも属さない，中間的な位置を示す事の方が多かった」：前掲 3)

6) Umaña Reyes によると，市内で１年間に行われるデモや集会 3,000 件以上のうち，2 割以上がソカロで実施されている。また，Forbes によれば，市内の示威運動の数は近年大幅に増加する傾向にあり，2011 年には 5,935 件，Umaña Reyes の研究が発表された 2014 年にはさらに 53%増しの 9,111 件を記録している： A. Umaña Reyes, Lorena (2014): Las representaciones sociales sobre el Zócalo de la Ciudad de México como espacio para la protesta. Estudio etnográfico en el contexto electoral de 2009: Revista Mexicana de Opinión Pública enero-junio, 16, 72-95: B. Forbes: 9,111 manifestaciones se realizaron en el DF durante 2014: Canacope <https://www.forbes.com.mx/9111-manifestaciones-se-realizaron-en-el-df-durante-2014-canacope/>, 2015.06.04 更新，2017.8.21 参照

7) 木下卓史（2017）：現代メキシコにおける先住民文化と帰属意識の動態化―国民統合，先住民の周縁化，深層のメキシコをめぐる試論―：応用社会学研究 59，188

8) Acerca de: Fideicomiso Centro Histórico de la Cd. de México HP <http://www.centrohistorico.cdmx.gob.mx/dependencia/acerca-de>, 2017.8.1 更新，2017.8.23 参照

9) Ciudad de México (2011): Órgano de Difusión del Gobierno del Distrito Federal: Gaceta oficial del Distrito federal 1161, 3-125

10) 小野良平（1997）：上野公園における公的儀式とその空間形成への影響：日本造園学会研究発表論文 60(5)，409-412

11) 落合一奏（1998）：＜メキシコ的なるもの＞視覚化とその背景：一橋論叢 120(4), 516-537

12) 前掲 11)

13) Sánchez Vázquez, María de Jesús, Pedro Francisco Sánchez Nava y Reina Cedillo (2007): Tenochtitlan y Tlatelolco durante el Posclásico Tardío: Ciudad excavada. Veinte años de arqueología de salvamento en la ciudad de México y área metropolitana: Instituto Nacional de Antropología e Historia(INAH),145-187

14) Hinojosa Hinojosa, José Francisco y Raúl Barrera Rodríguez (2003): El basamento prehispánico de las calles de Luis González Obregón y Argentina: Excavaciones del Programa de Arqueología Urbana, INAH, 328pp

15) López Luján, Leonardo y Alfredo López Austin (2011):El Coatepantli de Tenochtitlan. Historia de un malentendido: arqueología mexicana(XIX)111, 64-65

16) 16 世紀に書かれた年代記には，祭祀センターは，一辺約 200 ブラサの方形の空間と表記されている（ブラサはスペインのファゾム。1 ブラサ=1.6718m）が，20 世紀の発掘調査により，実際には 500 メートル四方以上あったことが分かっている：A. De Sahagún, Fray Bernardino (2000): Historia general de las cosas de Nueva España Tomo I: CONACULTA, 469pp, B.前掲 10)

17) 前掲 16）A

18) 2007 年までに実施された考古学調査では，40 以上の以降が確認されている：Matos Moctezuma, Eduardo (2007): La Cuenca de México. Posclásico Tardío (1350-1519 d.C.): Arqueología mexicana (XV) 86, 58- 63

19) Matos Moctezuma, Eduardo (1993): Tenochtitlan: arqueología mexicana(I)4, 19

20) Matos Moctezuma, Eduardo (2012): La Plaza Mayor o Zócalo en tiempos de Tenochtitlan: Arqueología mexicana (XIX) 116, 24-27

21) タウンゼント，リチャード・F（2001）：アステカ文明：創元社，334pp

22) Cosío Villegas, Daniel: Historia General de México, Volumen 1: El Colegio de México, 734pp

23) 前掲 20)

24) Rico Mansardo, Luisa Fernanda(2004):Exhibir para educar. Objetos, colecciones y museos de la ciudad de México(1790-1910):Ediciones Pomares, 447pp

25) フランセス・アシメニスの著作「Dotzé llibre del Crestiá （キリスト教 12 書）（1385 年）」中には，キリスト教国に相応しい都市の条件が記述されており，スペイン本国では，これらを満たした都市が理想とされた。アシメニスによると，町の中心には広場と教会により構成される「中央広場（プラサ・マヨール）」が置かれるべきで，この概念は，メキシコをはじめとするアメリカ各地のコロニアル都市の形成に影響を与えた：A. Mínguez, Victor y Inmaculada Rodríguez Moya (2006): Las ciudades del absolutism: arte, urbanismo y magnificencia en Europa y América durante los siglos XV-XVIII: Universitat Jaume I, 417pp, B. Alberto Montaner, Carlos (2003): Los latinoamericanos y la cultura occidental: Norma, 421pp

26) イベロアメリカ・スペイン領の植民地立法。

27) Alberto Manrique, Jorge (1997): La Catedral como monumento manierista y símbolo urbano: La Catedral de México. Problemática, Restauración y Conservación en el futuro: Instituto de Investigaciones Estéticas-Universidad Autónoma de México, 259pp

28) 前掲 27)

29) Archivo histórico Excélsior: ¿Qué pasó ahí?... Conoce más del Antiguo Palacio del Ayuntamiento. Este recinto histórico con seis siglos de historia forma parte del patrimonio cultural de la Ciudad de México: Excélsior <http://www.excelsior.com.mx/comunidad/2013/08/02/911729>, 2013.8.2 更新，2017.8.19 参照

30) 前掲 22)

31) Rubial García, Antonio (2012): La Plaza Mayor de la ciudad de México en los siglos XVI y XVII: arqueología mexicana (XIX)116: 36-43

32) 前掲 31)

33) Olvera Ramos, Jorge (2007): Los mercados de la Plaza Mayor en la Ciudad de México: Centro de estudios mexicanos y centroamericanos, 167pp

34) Matos Moctezuma, Eduardo (2012): La Plaza Mayor o Zócalo en tiempos de Tenochtitlan: Arqueología mexicana (XIX) 116, 24-27

35) 前掲 31)

36) 前掲 31)

37) Rueda Smithers, Salvador (2012): Un día en la Plaza Mayor de México (siglo XVIII). La ciudad y los signos: arqueología mexicana (XIX)116, 44-49

38) Schávelzon, Daniel (1990): La conservación del Patrimonio Cultural en America Latina. Restauración de edificios prehispánicos en Mesoamérica, 1750-1980: Universidad de Buenos Aires- Facultad de Arquitectura, Diseño y Urbanismo, Instituto de Arte Americano e Investigaciones, 270pp

39) Matos Moctezuma, Eduardo (1998): De Coatlicue al Templo Mayor: arqueología mexicana (V)30, 18-21

40) 前掲 37)

41) González Gamio, Ángeles (2012): Carlos IV en el Zócalo y la Constitución de Cádiz: arqueología mexicana (XIX)116, 50-55

42) 本国スペインで 1812 年 3 月 19 日に公布された 1812 年憲法は，スペイン人と副王領民の間にあった不平等の解消など，植民地の人々にとって，本国と植民地の関係性改善が期待される内容であったが，それ故に，同年 9 月 30 日にはヌエバ・エスパーニャ（当時のメキシコの国名）でも公布されたものの，副王により停止された：中川和彦（2000）：ラテンアメリカの独立の動きと先駆的憲法：成城法学 61、67-93

43) Lombardo, Sonia (2012): La independencia en la Plaza Mayor: arqueología mexicana (XIX)116, 56-63

44) 前掲 43)

45) Villalobos Jaramillo, Javier (2012): Los 100 sitios y Monumentos más importantes del Centro Histórico: Matesis Asociados, 123pp

46) Toro, Alfonso (1961): Compendio de Historia de México. Revolución de Independencia y México Independiente: Editorial Patria, 624pp

47) Cosío Villegas, Daniel: Historia General de México, Volumen 2: El Colegio de México, 1585pp

48) Delgado del Cantú, Gloria M (1989): Historia de México. Formación del Estado Moderno: Alhambra Mexicana, 449pp

49) Dosier (2012): El Zócalo del siglo XIX al XXI: arqueología mexicana XIX(116), 64-73

50) 1810 年 9 月 16 日，グアナファト州ドローレスにて，イダルゴ神父がスペインからの独立の為に戦う事を市民に呼び掛けた演説で，最後に「メキシコ人たちよ。メキシコ万歳」と叫んだとされるフレーズが，大統領により再現される：Ávila, Alfredo y Luis Jáuregui(2010): La disolución de la monarquía hispánica y el proceso de independencia: Nueva Historia general de México: El Colegio de México, 355-396

51) Obrasweb: México, la tierra de las banderas monumentales <http://www.obrasweb.mx/construccion/2013/02/22/mexico-la-tierra-de-las-banderas-monumentales >, 2013.2.24 更新，2017.8.23 参照

52) Watanabe, Yuki (2015): La zona arqueológica del Templo Mayor como un espacio Manual: Análisis del material interpretativo: Tesis de Maestría en Museología del ENCRyM-INAH, 156pp

53) García Martínez, Bernardo (2010): Los años de la conquista: Nueva Historia general de México: El Colegio de México, 169-215

54) コヨルシャウキ女神は，ウィツィロポチトリ神の姉で，メシカの伝説には，ウィツィロポチトリに殺され，四肢と頭部を切断され捨てられる場面が描かれている為，テンプロ・マヨールをウィツィロポチトリ神に捧げられた神殿だとする説が裏付けられた：Cué, Lourdes, Fernando Carrizosa y Norma Valentín(2010): El monolito de Coyolxauhqui. Investigaciones recientes: arqueología mexicana (XVII)102,42-47

55) 前掲 11)

56) 2017 年 9 月 19 日の震災後には，復興を呼びかける大型コンサートが開催された：El Sol de México :¡Listo el Zócalo para el concierto#EstamosUnidosMexicanos! <https://www.elsoldemexico.com.mx/gossip/celebridades/listo-el-zocalo-para-el-concierto-estamosunidosmexicanos-262256.html > 2017.10.8 更新，2018.3.11 参照